真・恋姫†無双-黒き英雄と白き英雄-

諸葛孔明

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双ー黒き英雄と白き英雄ー

【Ｎコード】
Ｎ２３４５Ｙ

【作者名】
諸葛孔明

【あらすじ】
鳴上総司が、この世界に舞い降りて数年が経過した。今、この世界は後の世に言う『官渡の戦い』の真っ只中である。カリスマはあれど流浪の将である劉備に付きそう北郷一刀は、劉備と共に汝南において攪乱戦を起こす。その討伐に向かったのが、鳴上総司であった。これは真・恋姫†無双とペルソナ４のクロスオーバーになってます

（前書き）

ペルソナ４と恋姫†無双とのクロスオーバー作品です。
主人公の名前は、『鳴上総司（ナルカミ ソウジ）』と言います。アニメと漫画。両方から名前をとってます。

――連載するつもりは、今の所ないのであらすじだけでも。
総司はある日、テレビの中にかつての「マヨナカテレビ」と似たような映像が映ったため、手をテレビへ翳すと、そのままテレビの中へと吸い込まれた。
目を開くと、そこはベルベットルーム。マーガレットから『外史』という存在を聞く。
話が終わると意識を失い、再び目を覚ますと、首に赤い布をした犬と少女――呂布がいた。
その後、色々とあり、董卓に仕えることになり、なんやかんやで董卓が曹操へと下り、今へと至る。

鳴上総司が、この世界に舞い降りて数年が経過した。
今、この世界は後の世に言う『官渡の戦い』の真っ只中である。
カリスマはあれど流浪の将である劉玄徳に付きそう北郷一刀は、劉備と共に汝南にて攪乱戦を起こす。その討伐に向かったのが、鳴上総司であった。
総司は、副将を曹仁、参謀を司馬懿、兵４０００を従えた。
一方の劉備と一刀は、張飛や趙雲と言った猛将に、軍師は諸葛亮と鳳統の２枚看板。兵は３５００。
兵の数は曹操軍と比べると僅かに劣るが、それをカバーするだけの実力が、張飛と趙雲にはあった。
そのため兵の数では優っていたが、総司は少しずつ押されていく。

そんな中、兵士達が戦い、倒れていく中で、総司と一刀は刃を交えていた。

「おおおおぉぉぉぉ！」

「はぁぁぁぁぁっ！！」

剣が幾度となくぶつかり、音が鳴り響く。
この２人は、聖フランチェスカ学園に通い、共に剣道部に所属していた。ただ、２人は同級生と言うわけでは無く、総司が３年、一刀が２年という、先輩後輩の間柄だった。

そう、この世界で再会して、それぞれの人物に仕えるまでは。
今は互いに譲れない物を持つ敵であり、好敵手（ライバル）でもある。

「……くっ」

総司の激しい攻めに耐えきれず、一刀は後ろへと退いた。
この一騎打ちで、有利なのは総司の方である。去年、『シャドウ』という異形のバケモノを相手に戦っており、その時の感覚は錆び付いてはいない。
夏侯惇や呂布といった猛将クラスと、剣のみで戦うと不利だが、中堅武将と戦うならば、互角以上に戦う事が出来る。
一刀は後ろへと退いたが、総司は攻めを止めない。

総司の渾身の一撃を放つと、一刀は剣で防ごうとする。
だが、幾度となく総司の攻撃を防いできた剣は、総司の渾身の一撃に耐えきれずに砕け散った。
そして総司は、そのまま蹴りを一刀の身体へと入れた。一刀は大きく咳をすると、地面へと膝を付く

「俺の勝ちだな、一刀」

「ま、まだだ。俺は、俺はまだやれるっ！」

息を荒げながらも、一刀はなんとか立ち上がる。

「――。そうか。なら、剣を新しく向かってこい」

一刀は、近くに居た劉備軍兵士から新しく剣を借りると、総司に向けて斬りかかる。
必死で剣を振るが、躱され、防がれ、逆に攻められた。

それが、しばらく続いた。
一刀は疲労で息を荒げているが、総司は息を乱していない。そのため、誰から見ても勝敗は一目瞭然であり、今の一刀では、総司には勝てない。
打ち合いは続いたが、遂に一刀は剣を杖代わりに地面へと突き刺した。
体力はもう限界。しかし一刀は、膝を折ろうとも、負けを認めようともしない。
その姿を見て、総司は一刀へ問い掛ける。
「……お前は、何のために戦う」
「ハァハァハァ。俺は、……桃香の『理想』のために、戦うと決めたんだ！　だから、だから、負けられないっ！！」
地面から剣を引き抜くと、一刀は総司へ向けて剣で斬りかかる。
その攻撃を、総司は避けると同時にカウンターを行い、一刀の腹部へ拳をめり込ませた。大きな咳をすると、蹌踉めき倒れそうになるが、再び剣を杖代わりにして、なんとか倒れなかった。
「アンタこそ……鳴上先輩こそ、何のために戦うんだ！　曹操や董卓のためなのか！？」
「勿論、それもある。だが、俺は己の『真実』のために戦うと決めている。……あの時からな」
「――……？」
「まあ、お前に言っても分からないだろうな。……一刀、先輩後輩の誼で命まで取ろうとは思わない。ここは退け」

「……・る」

「？」

「断る！　まだ皆、戦ってるんだ！！　だから、俺は諦めないっ」

「――そうか。なら、負けを認めるやってやる」

総司は、一刀へ向けて攻撃を仕掛けた。
攻撃のスピードや威力は、初めの時から全く変わってないが、疲労している一刀にとっては、スピードは速くなり、攻撃は重くなったように感じてしまう。
更に厄介なことに、一刀の足は千鳥足となり、上手く歩けなくなっている。そのため総司が放つ一撃を、剣で防ぐたびに、足が後ろへと下がってしまった。
結果は見えている勝負だが、総司は手加減をせずに、真っ向から一刀へ向かって行く。

「ぐっぁ……。ハァハァハァ」

一刀は体力は限界に近かった。
相手の強さに、心が折れかかっていた時、一刀は声を訊いた。

――我は汝　汝は我　我は汝の心の海から出し者なり――

――汝　理想を求めるならば　双眸を見開き　我を畏れず掴み取れ――

一刀がいる地面に、白黒の人の仮面が浮かび上がると同時に、青い円柱型の光が天へ向けて噴き上がる。
そして上空から1枚のカードが、一刀の前へと降りて来た。
そのカードは、激しく雷を纏っており、生半可な覚悟では掴むことは出来ない。下手をすれば、感電死する可能性がある。だが、一刀は畏れずにカードへ手を伸ばす。
カードへ触れた瞬間。激しい痛みを感じたが、一刀はカードへ向けた手を引っ込めようとはしない。
そしてカードへ手が届くと同時に、再び声が聞こえた。

――我が名は……

一刀はカードを、握り潰す。

「ゼクロム!!」

カードが硝子のように割れると、一刀の上に3メートル近い高さを誇り、漆黒の体と巨大な翼を持つ2足歩行のドラゴンのような外見であり、尾部はタービン式の発電機を思わせる形状になっていた。
『ゼクロム』は、咆哮を上げると、尻尾の発電機を回転させ雷を生み出し、その雷を総司へ向けて雷撃を放った。
タダの人間が受ければ、即死間違いなしの電撃。
総司は、一刀と同じように1枚のカードを掌に出現させると、そのカードを握り潰す。

「イザナギ！！」

カードが硝子の様に割れると、黒い学ランとも取れる服装に、矛にも似た巨大ナイフを持ったペルソナが現れた。
現れた『イザナギ』は、巨大ナイフで攻撃をしようとはせずに、そのまま地面へ突き刺した。
迫り来る雷撃を、『イザナギ』は右手で受け止める。

「――ぐっ……ぐっ――――ッッ」

数秒続いた雷撃が止まる。『イザナギ』の身体には、『ゼクロム』の雷が残っているのか、静電気のような音を立てている。また避雷針と同じ原理で、『イザナギ』は地面へと電気を流し、元々「雷耐性」もあるため、ダメージはそれほど受けてなかった。
しかし、少しのダメージは受けている。これが続けば総司は不利になる。
『イザナギ』では、『ゼクロム』の相手はキツイと感じた総司は、『イザナギ』へ向けて手を伸ばした。『イザナギ』は消え去り、１枚のカードが残り、回転を続けている。
すると回転していたカードの絵柄が変わり、カードは青い炎に包まれる。
総司は再び握り潰すかのように、掌を握り締めた。

「レシラム！！」

カードが硝子のように割れると、３メートルを超える高さに、純白の体と腕と一体になった巨大な翼を持つ２足歩行のドラゴンのような外見をしており、尾部はジェットエンジンのようになっている。
『レシラム』は咆哮すると、まるで共鳴するかのように『ゼクロム』も咆哮した。

「一刀、この二体のペルソナはもともと一体のペルソナだったが、ある「きっかけ」で『理想』と『真実』に分かれたんだ」

「……・理想と真実に」

「そうだ。――ただお前が、『ゼクロム』を覚醒させるとは思わなかったが。だけど、これで本気が出せる」

「――っ！？」

獰猛な威圧感。
思わず一刀は一歩後ろへと下がってしまう。
これから始まる、二体の龍の戦いに誰もが戦慄と期待と不安を抱えたが、それが叶うことは無かった。
一刀の横に、劉備軍兵士が近寄る。

「北郷さま。曹操軍後方より３０００の援軍が向かっているという報が！　率いるのは、呂布と張遼！！」

「……っ！　呂布と張遼が」

今までは趙雲と張飛という猛将を、相手取れる相手で居なかったため、なんとか有利に状況を進めていたが、呂布と張遼が来たとなれば、状況は一転、不利へと傾く。

だが、この状況で撤退の命を下すわけにはと思い、目の前に居る総司を見た。
すると総司が出していた『レシラム』は、いつの間にか消えている。

「一刀、今日の続きは赤壁――いや博望坡まで持ち越しだ」

「……ああ。次は鳴上先輩。アンタを超えてみせる！！」

「楽しみにしてる。……再戦の時まで、少しでも『ペルソナ』の扱いに慣れておいてくれよ」

そして劉備軍は撤退。
劉備は、この後、劉表の元に身を寄せることになる。
曹操は、この後、『官渡の戦い』にて袁紹を下し、天下の半分を制することになる。

～おまけ1～

「零（司馬懿の真名）。よく恋と霞の2枚看板を動かせたな」

「いやですねぇ。無理に決まってるじゃないですか！」

「……なに？」

「今は袁紹さんと戦いの最中ですよ？　その2人を動かして、その隙に攻められたらどうするんです？

……『袁紹にそんな器用な事が出来るワケないだろ』とかは、つっこまないで下さいね♪」

「それは分かっている。だから聞いたんだ」

「んふふふー。では、種明かしを致しましょう。実は――三馬鹿……じゃなくて、三羽烏の凪と沙和に変装して貰ったんですよー。凪は霞さんに、沙和は恋さんにと言った具合にですね」

「――凪がよく霞の恰好をしたな」

「始めは暴れてましたけど、余りにもウザイ――じゃなくて、五月蠅いのでちょっと寝て貰って、その隙に着替えさせました」

「……」

「あ、手荒な真似はしてませんよ？　ほら、私って軍師ですから？　ちょっと薬を使ってですね」

「十二分に手荒な真似だろ」

「そうですか？　ああ、そうだ。一応、大人しくさせるために、総司さんと一緒にお出かけ券を上げたので、後はお願いします」

「まて、聞いて無いぞ」

「それはそうですよ。今、言ったんですから」

「……」

「心配しないでください。月さんと華琳さまには、秘密にしてあげますから。さぁて、撤退の準備を始めましょうか」

～おまけ2～

曹操軍本拠地・許都

「ご主人様。重く、ないですか？」

「いや、そんな事は無い（月の重さより、華琳の視線の方が重い）」

「――そこの給仕。玉座の間で、しかも作戦会議中に何をしてるのかしら？」

「？　見て分かりませんか。ご主人様の膝の上に乗ってるんです」

「それぐらい分かるわ。私が訊いてるのは、どうしてアンタが、ソイツの、膝の上に乗ってるかって、聞いてるのよ！」

「そんなの決まってるじゃ無いですか。ご主人様の事が、好きだからです。それに、こうしているとご主人様のアレが私の所に当たって」

「「――へぇ」」

華琳と同じくもう一方から、怨嗟の声がした。

軍師側の席に座っている少女――賈駆からだ。何故か机の上に、

砥石を置くと、ブツブツと何か唱えながら刃を研ぎ始めた。
そっとしておこう。そう総司は強く心に決めた。
月が微妙に黒くなったのは、やはり己の心の裡に溜まったストレスから生まれた『魔王』としての自分と向かい合い、受け入れたからだ。因みに、黒くなるのは何故か対・華琳のみで、後は何時もの優しく純粋無垢な月である。

「あっ、華琳さま。もしかして、羨ましいんですか？」

「――はぁ？　誰が、誰の、何を、どうしようと羨ましく思うハズないでしょう」

「……そうですか」

「何よ。何か言いたいことでもあるの？」

「いいえ、別になにもありません」

会議は順調（笑）に進んだが、月の放つ黒いオーラと、華琳の威圧感を受けた総司は、精神的にかなり疲労することになるが、なんとか倒れずに済むが、このストレスは博望坡や赤壁において北郷一刀相手には発散されることになる。

（後書き）

ご意見・ご感想をお待ちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2345y/

真・恋姫†無双-黒き英雄と白き英雄-

2011年11月5日04時08分発行